

中学校における家族と多様性に関する授業開発と協働実践

Development of lesson of Family and Diversity for Junior High School

大藪千穂¹・吉川夏葵²・小井戸あや乃³・水谷直美⁴Oyabu Chiho¹, Yoshikawa Natsuki², Koido Ayano³, Naomi Mizutani⁴

[キーワード Keyword]	家族, 多様性, 中学校, 授業実践
[所 属 Institution]	¹ 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University), ² 岐阜大学教育学部学生 (Faculty of Education, Gifu University), ³ 兵庫教育大学大学院院生 (Hyogo University of Education), ⁴ 岐阜大学教育学部附属小中学校 (Faculty of Education Affiliated Compulsory School System)

[要 旨 Abstract]

本研究では、家族と多様性に関する授業案を、小学校、中学校、高等学校の家庭科の学習指導要領と教科書を分析した上で開発・実践した。本論文では、中学校家庭科での授業開発実践について紹介する。授業実践は、F 中学校の3年生3クラス94名に対して2022年11月に行った。授業実践では、家族の多様性の認識、性別役割についての自分の意識、アンコンシャス・バイアスの気づき、そして性的マイノリティの正しい知識を理解でき、自分の周りでの出来事、自分の経験を超えた知識を身に付けることができることを目標とした。この結果、授業によって意識や認識に変化があったことから効果は見られたが、理解できるが許容することに葛藤している姿も見られた。中学生の多くは、学校という狭い社会の中だけで生きていることから、その中での価値観が絶対な基準になりがちであり、そこから外れることは中々受け入れられない。特に家族やジェンダー、性的マイノリティ等に関する内容は、授業を用いて生徒全体で情報を共有し、少しずつ意識を変えていくことが重要となる。

1. はじめに

人生100年時代の現在、家族の個人化、ライフコースの多様化を背景に、晩婚化・未婚化・非婚化、晩産化・少子化、単独世帯の増加など、家族の形が多様化している。それに伴い、家族について考えるうえで、教科書の内容だけでは児童・生徒に現状を説明することが難しくなっている。多様な家族の形を知り、これからの家族のあり方について学校教育でも教えていく必要がある。本研究では、様々な家族像を紹介し、その上で、多様な家族の形、家族の現状や問題について知り、これからのよりよい家族のあり方について考えていくきっかけになる教材を開発し、授業実践をすることを目的としている。授業を通して、家族に関する考え方に変化が生じたかを分析することで、今後の家族の授業の可能性について明らかにしたい。

森岡・望月(1997)は、「家族とは、夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的かわりあいと結ばれた、幸福 (well-being) 追求の集団である」と定義した。彼らは家族の特徴を、①(少数の)親族、②愛情による結合、③集団の3点に求めている。以後、多くの定義が時代とともに再考されてきたが、普遍的な定義は難しく、近年は現実から考える必要があると考えられている。現実の家族像は近年急速に変化している。国勢調査(2020)からみると、核家族の中でも「夫婦と子どもから成る世帯」(25.1%)よりも「単独世帯」(38.1%)の方が多く、「夫婦と子どもから成る世帯」数は減少しており、「単独世帯」数は増加している。次いで「夫婦のみの世帯」(20.1%)、「ひとり親と子どもからなる世帯」9%となっており、「サザエさん」や「ちびまる子ちゃん」のような「その他」の家族形態は7.7%と最も少ない形態であるのが現状である。婚姻に関してもかなり変化してきている。平均初婚年齢は男性31歳、女性29.4歳と上昇傾向にあり晩婚化が進んでおり、婚姻数自体も減少している。50歳時の未婚率は増加傾向を示しており、2022年では男性28.3%、女性17.8%と、晩婚化、未婚化、非婚化が進んでいる。また出生数は減少の一途をたどっており、2022年の出生数は前年比5%減で約77万人になる見通しであり、急減している。これは日本では婚外子が少ないことから、新型コロナウイルスの影響もあり2020年から2021年に婚姻数が急減したことが理由とも考えられる。さらに離婚件数は2003年からは減少傾向にあるが約19万3千組(2020)である。離婚によってひとり親世帯になる数も増加しており、母子世帯は約123.2万世帯、父子世帯18.7万世帯である。このような晩婚化、未婚化、非婚化、少子化そして離婚など、婚姻をめぐる状況は急速に変化しているが、家族の問題は多様であり複雑であり、パーソナルな事柄でもあるがゆえに、学校教育では教えるににくい内容であった。また一般的に家族は最も身近な集団であるが、通常自分の家族のことしか知らないため、授業で扱いにくい。しかし家族形態が大きく変化している事実を児童生徒には客観的に教える必要があり、これからは多様な生き方を許容する社会になっていかなければならない。こ

れまでも家族の多様性やジェンダー、性的マイノリティに関する内容の授業は実施されているが、授業時間数が少ない中、一つの授業の中で実施することは難しかった。本研究では、小学校、中学校、高等学校の学習指導要領と教科書を確認してから、多様な家族と性別役割、性的マイノリティに関する1時間の家族に関する授業案を一つ作成し、その内容を校種に合うように修正し全ての校種で授業実践をした。本論文では、中学校における授業実践について報告する。

2. 学習指導要領と教科書における家族

2.1. 学習指導要領の該当内容

家族の内容は小学校、中学校、高等学校では家庭科の「A 家族・家庭生活」「B 衣食住の生活」「C 消費生活・環境」のうち、「A 家族・家庭生活」で扱っている。以下では、それぞれの校種での家族の内容を抜粋した。

(1) **小学校:**日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、習得した知識及び技能を活用して様々な解決方法を考え、計画を立てて実践し、課題を解決する力と生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を育てることを意図している。次の1)から4)までの項目について、課題をもって、家族や地域の人々と協力し、よりよい家庭生活に向けて考え、工夫する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

1) 自分の成長と家族・家庭生活

ア 自分の成長を自覚し、家庭生活と家族の大切さや家庭生活が家族の協力によって営まれていることに気付くこと。

2) 家庭生活と仕事

ア 家庭には、家庭生活を支える仕事があり、互いに協力し分担する必要があることや生活時間の有効な使い方について理解すること。

イ 家庭の仕事の計画を考え、工夫すること。

3) 家族や地域の人々との関わり

ア（ア）家族との触れ合いや団らんの大切さについて理解すること。

（イ）家庭生活は地域の人々との関わりで成り立っていることが分かり、地域の人々との協力が大切であることを理解すること。

イ 家族や地域の人々とのよりよい関わりについて考え、工夫すること。

4) 家族・家庭生活についての課題と実践

ア 日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、よりよい生活を考え、計画を立てて実践できること。

(2) **中学校:** 家庭や地域との連携を図り、人と関わる活動を充実することにより、生徒が家庭生活や地域を支える一員であることを自覚できるようにすることを意図している。次の1)から4)までの項目について、課題をもって、家族や地域の人々と協力・協働し、よりよい家庭生活に向けて考え、工夫する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

1) 自分の成長と家族・家庭生活

ア 自分の成長と家族や家庭生活との関わりが分かり、家族・家庭の基本的な機能について理解するとともに、家族や地域の人々と協力・協働して家庭生活を営む必要があることに気付くこと。

2) 幼児の生活と家族

ア（ア）幼児の発達と生活の特徴が分かり、子供が育つ環境としての家族の役割について理解すること。

（イ）幼児にとっての遊びの意義や幼児との関わり方について理解すること。

イ 幼児とのよりよい関わり方について考え、工夫すること。

3) 家族・家庭や地域との関わり

ア（ア）家族の互いの立場や役割が分かり、協力することによって家族関係をよりよくできることについて理解すること。

（イ）家庭生活は地域との相互の関わりで成り立っていることが分かり、高齢者など地域の人々と協働する必要があることや介護など高齢者との関わり方について理解すること。

イ 家族関係をよりよくする方法及び高齢者など地域の人々と関わり、協働する方法について考え、工夫すること。

4) 家族・家庭生活についての課題と実践

ア 家族、幼児の生活又は地域の生活の中から問題を見いだして課題を設定し、その解決に向けてよりよい生活を考え、計画を立てて実践できること。

(3) 高等学校: 次の1)から5)までの項目について、生涯を見通し主体的に生活するために、家族や地域社会の人々と協力・協働し、実践的・体験的な学習活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

1) 生涯の生活設計

ア 人の一生について、自己と他者、社会との関わりから様々な生き方があることを理解するとともに、自立した生活を営むために必要な情報の収集・整理を行い、生涯を見通して、生活課題に対応し意思決定をしていくことの重要性について理解を深めること。

イ 生涯を見通した自己の生活について主体的に考え、ライフスタイルと将来の家庭生活及び職業生活について考察し、生活設計を工夫すること。

2) 青年期の自立と家族・家庭

ア 生涯発達の視点で青年期の課題を理解するとともに、家族・家庭の機能と家族関係、家族・家庭生活を取り巻く社会環境の変化や課題、家族・家庭と社会との関わりについて理解を深めること。

イ 家庭や地域のよりよい生活を創造するために、自己の意思決定に基づき、責任をもって行動することや、男女が協力して、家族の一員としての役割を果たし家庭を築くことの重要性について考察すること。

3) 子供の生活と保育

ア 乳幼児期の心身の発達と生活、親の役割と保育、子供を取り巻く社会環境、子育て支援について理解するとともに、乳幼児と適切に関わるための基礎的な技能を身に付けること。

イ 子供を生み育てることの意義について考えるとともに、子供の健やかな発達のために親や家族及び地域や社会の果たす役割の重要性について考察すること。

4) 生涯の生活設計

ア 高齢期の心身の特徴、高齢者を取り巻く社会環境、高齢者の尊厳と自立生活の支援や介護について理解するとともに、生活支援に関する基礎的な技能を身に付けること。

イ 高齢者の自立生活を支えるために、家族や地域及び社会の果たす役割の重要性について考察すること

5) 共生社会と福祉

ア 生涯を通して家族・家庭の生活を支える福祉や社会的支援について理解すること

イ 家庭や地域及び社会の一員としての自覚をもって共に支え合って生活することの重要性について考察すること。

以上、小学校、中学校、高等学校の学習指導要領の家族に関連する内容を確認したが、本論文で紹介する中学校に関しては特に、「A家族・家庭生活」の(1)アと(3)ア(ア)が関連している。(1)アでは、自分の成長を振り返ることを通して、自分の成長と家族や家庭生活との関わりが分かり、家族・家庭の基本的な機能について理解するとともに、家族や地域の人々と協力・協働して家庭生活を営む必要があることに気づくことをねらいとしている。詳細な記載としては、(1)ア自分の成長と家族や家庭生活との関わり：自分がこれまで成長してきた過程を振り返り、自分の成長や生活は、家族や家庭生活に支えられてきたことを理解できるようにする。家族・家庭の基本的な機能：子どもを育てる機能、心の安らぎを得る機能、生活文化を継承する機能などを理解できるようにする。その際、これまでの自分の成長や現在の生活も、これらの機能が果たされることによって、支えられていることが分かり、家族・家庭の重要性について理解できるようにする。家庭＝家族の生活の場。家族との関わりの中で衣食住や安全、保護、愛情などの基本的な要求を充足し、心の安定や安らぎを得ていることなどに気付くようにする。家族や地域の人々と協力・協働して家庭生活を営む必要があること：家族や地域の人々が互いに助け合い、連携すること、健康・快適・安全で環境に配慮した家庭生活が営まれていることが分かること、家族や地域の人々と協力・協働する必要があることに気づくようにする。(3)ア(ア)では、家族の互いの立場や役割が分かり、それらを踏まえて家族が協力することによって家族関係をよりよくできることについて理解できるようにする。家族の互いの立場や役割：自分自身を含め家族には立場や役割があることを理解できるようにする。協力することによって家族関係をよりよくできる：家族一人一人が、互いの立場や役割の違いを踏まえて、協力することで家族関係がよりよくなることを理解できるようにする。また、家族の一員とし、協力できることがあることに気づくようにする。その際、これからの自分の生活に関心を持ち、将来の家庭生活や家族との関わりに期待をもてるようにする。これらの全ての内容において、子どもによって家族構成や家庭生活の状況が異なることから、各家庭や子どものプライバシーに十分に配慮するとなっている。

2.2. 教科書の該当内容

本節では、上記の学習指導要領を基に作成されている教科書の家族に該当する部分を確認したい。小学校で用いた教科書（開隆堂）では、小学校5年生、6年生の2年間で、大きく分けて5つの単元から成り立っている。①家族の生活 再発見、②できるよ、家庭の仕事、③いっしょにほっとタイム、④生活時間をマネジメント、⑤共に生きる地域での生活、である。中学校（東京書籍）では、1.家族・家庭と地域 ①私たちの生活と家族・家庭の機能、②中学生としての自立、③家庭生活と地域との関わり、2.幼児の生活と家族 ①幼い頃の振り返り、②幼児の体の発達、③幼児の心の発達、④幼児の1日の生活、⑤支えられて身に付ける生活習慣、⑥幼児の生活と遊び、⑦幼児との関わり方の工夫、⑧幼児との関わりを生活に活かす、⑨子どもにとっての家族、3.これからの家族と地域 ①家族との関わり、②家族や地域の高齢者との関わり、③地域での協働を目指して。と少し細かくなり、特に幼児の内容が多くなる。高等学校の家庭基礎（開隆堂、東京書籍、実教出版、教育図書）では、各項目の内容は中学に比べるとより詳細になる。ここでは詳しい内容は省略するが、項目としては以下の3つがあげられる。①人生を見通し、共に生きる（①青年期の自立、②家族・家庭を考える）、②子どもの発達と保育（①子どもの発達と生活、②子どもの育つ環境）、③高齢期の生活（①高齢者の生活と課題、②高齢社会を生きる）。これらの中で、今回の家族と多様性の内容は、小学校では①と②、中学校では①と②、高等学校では①と②の内容に対応する。

3. 方法

3.1. 授業の趣旨

現在、家族の形が多様化してきている。そのため、今までの家族の視点で「家族」について語るができなくなっている。自分の知っている、あるいは考える家族の形だけでなく、新たな視点の「家族」像を受け入れることができるように、多様な家族について知ることが必要である。また性別役割分担、ジェンダー、アンコンシャス・バイアスにとらわれず、自分らしく人生を歩んでいくことができるように、多様な性について知る必要があると考える。しかし関連する教科書の内容や学習指導要領では、性の多様性については、中学校家庭科ではあまり触れられていない。多様性について正しい知識を得ないと、差別的な言葉で相手を傷つけてしまうことも生じる。

本論文では『新しい技術・家庭 家庭分野 自立と共生を目指して』（開隆堂）の「私たちの成長と家族・地域」の「1章 家族・家庭と地域」の全3時間分の1時間目「私たちの生活と家族・家庭の機能」を取り上げた。ここは主に3つの構成で書かれている。①これまでの自分の生活を振り返り、いっしょに生活をしてきた人にしてもらってうれしかったことや、感謝していることを書き出す活動。この活動を通して、いろいろな場面でいろいろな人に支えられて成長してきたことに気づくことができるようにする。②家族・家庭の基本的な機能について学ぶ。この学びを通して、よりよい生活を営むためには、一人一人が機能を担い、自分のできる役割を果たしていくことが大切であることに気づくことができるようにする。また、小学生の頃に比べ、できることが増えたことから、中学生である私たち自身も、家族の一員として、積極的に担えるように、家庭での実践につなげる。③「いろいろななかぞくのはん」という絵本を読んで、家族という言葉からイメージするものを挙げる。家族を1つ選び、果たされている機能についてグループで意見交流をする。これらのことを通して、家族・家庭の多様性について知り、より過ごしやすくなるように、生活を工夫できるようにする。本授業では、以下の3点を授業の視点として開発・実践することとした。①自分の家族だけが当たり前であると思わず、様々な形の家族があることを知り、受け入れることができる。②よりよい家族関係をつくっていくためには、自分のアンコンシャス・バイアスに気づき、性別によって、役割を決めつけるのではなく、自分でやれることを主体的・積極的にやることを必要であることを理解できる。③性の多様性について知り、差別的な言葉ではなく、言い換える言葉があることを理解し、多様な性を受け入れ、みんなが自分らしく生きていける社会になるために自分にできることを考えることができる。

3.2. 授業構成

本授業で開発、実践した授業（資料参照）は以下の流れで実施することとした。授業はスライドを用いて進めた。

- ① A～E（A 母と子、B 養子・里子、C 同性カップルと養子、D 事実婚、E 父・母・子）の5つのイラストを見て、家族と「思う・迷う・思わない」にそれぞれ○をつける。
- ② 自分が家族であると考え要素を選択（複数可）する（養育・血縁関係あり/なし・同居・多様な種類・性別関係なし・法律・心（支え合い、助け合い、協力、絆、本人たちの気持ち、愛、信頼）・婚姻関係・よくわからない・その他）。
- ③ 「いろいろな家族の形」という動画（NPO PILCON の YouTube <https://www.youtube.com/watch?v=VZYrgm->

0gJt=10s。約3分)を見て、グループで交流する。

- ④ 家族に関する法律について学ぶ。
- ⑤ 男女の家事関連時間についてのグラフ(図1)を見て、分かることを書く。
- ⑥ クイズやイラストから自分のアンコンシャス・バイアスに気づく。(ここでは、現在、多くの企業や学校現場で注目され、取り入れられているSDGsの中の5.ジェンダーをとりあげる。これからどのようにしていくとよいか、これからの姿を書く。
- ⑦ LGBTQ+を含む性の多様性について知る。(動画を2つ視聴する3分と7分)
「多様な性ってなんだろう?」(特定非営利活動法人 ReBit)。動画では、実際に多様な性を持つ人々が、詳しく説明している。また「中学1年生の決意～男の子として生きたい～」という動画を視聴する。これは子どもたちと同じ年代の中学生で「身体の性」と「心の性」に違和感をもって生活しており、カミングアウトを経て、「心の性」である男として生きている実際の中学生の動画である。また、差別的な言葉は、言い換えられる別の名称があることを知り、相手を傷つけることなく、受け入れることができることを知らせる。さらに、現在では、制服や水着において、性別に関係なく自分で選択できる学校が増えてきている現状を写真やデータを通して知る。
- ⑧ パートナーシップ制度について知る。日本では一部の自治体でしか導入されていないことを紹介する。また、世界では、同性婚を認める国が増えているが、日本では同性婚が認められていない事実を伝える。
- ⑨ 「国際カミングアウトデー」の紹介と、2020年の東京オリンピックでLGBTQであることをカミングアウトした選手が過去最多になったが、ホスト国である日本はゼロであったという現状も伝えることで、日本ではなかなか認められておらず、カミングアウトしにくい雰囲気にある厳しい現状を知る。そのうえで、ALLY(アライ)として、支援者になることができることを理解し、みんなが自分らしく生きていくために、自分にできることを考える。
- ⑩ ①で授業前に行ったA～Eの5つのイラストを見て、もう一度、「思う・迷う・思わない」に○をつける。
- ⑪ 今回の授業を通して、これから家族がどのようになっていくとよいかを考える。

4. 結果

授業は、F中学校3年生の3クラスの94名を対象に、2022年11月に対面で筆者(大藪)が授業を実践し、中学校の家庭科教師(水谷)がT.Tとして協働で授業実践をした。授業は50分であるが、1クラスのみ45分の短縮授業となったため、動画視聴のスピードを少し早めたが、授業構成は同じである。授業を実施するにあたって、校長と教師に事前に授業スライドとワークシートを確認してもらい、実施学年と時期を相談し、家庭科の「幼児と家族」の単元終了後の中学3年生を対象とした。

4.1 家族の認識(授業構成の①～④)

多様な家族のイラストA～E(A母と子、B養子・里子、C同性カップルと養子、D事実婚、E父・母・子)を見て、家族であると「思う・迷う・思わない」に授業前・授業後に○をつける。表1から、C(同性カップルと養子)、D(事実婚)が家族であるか「迷う」と回答した生徒が授業前は約35%であり、「思わない」と回答した生徒が授業前では約8%であった。授業後では、C(同性カップルと養子)が家族であると「迷う」と回答した生徒は約5%、「思わない」と回答した生徒も約1%と減少した。さらに、D(事実婚)が家族であると「迷う」と回答した生徒は約13%、「思わない」と回答した生徒は、約1%と両者とも減少した。このことから、授業前では、自分自身が経験したこと、周りで見たことがあるかどうかなどの生活経験から家族であると判断している生徒が多いことが分かる。授業を受けたことで、世界には多様な家族があることを知り、家族と捉える範囲が広がり、家族の多様性について受け入れられるようになったのではないかと考えられる。B(養子・里子)が家族であると「迷う」「思わない」と回答した生徒は、授業前は約20%であったが、授業後では約4%に減少した。授業前は「養子・里子は両親のどちらとも血がつながっていない」、「気を遣うから家族であるとまでは言えない」といった意見も多かった。しかし授業を通して、心のつながりや支え合い、助け合いといった協力で家族になっていくという考え方をすることで、受け入れられるようになったのではないかと考えられる。

次に家族であると考え要素(養育・血縁関係あり/なし・同居・多様な種類・性別関係なし・法律・心(支え合い、助け合い、協力、絆、本人たちの気持ち、愛、信頼)・婚姻関係・よくわからない・その他)、全てに○をつけてもらった。この結果(表2)、支え合い、助け合い、協力、絆、本人たちの気持ち、愛、信頼を含む「心情」に関する要素が一番多くなった。家族を考えるうえで、法律や血縁関係、婚姻関係といった、目に見えるものではなく、心の繋がりが大切であると考え生徒がほと

んどであった。「心情」に関する要素の中で、特に多かった要素は、「本人たちの気持ち」（74.5%）、「信頼」（69.1%）、「愛」（66.0%）、「絆」（64.9%）は、6割以上の生徒が重要であると答えた要素であった。自由記述でも家族について考えるうえで、「お互い（本人）の気持ちがあれば家族である」、「お互いに信頼していること」といった、第3者である他人が決めることではないと考える生徒が多いことが明らかとなった。さらにこの授業の前の家庭科の授業で、「幼児の生活と家族」について学習しており、家族の愛や信頼関係が大切であること、また、自分たちも同じような道を通して、周りの人々に育ててもらったことを実感していることから、家族であると考えた要素で、「支え合い」（63.8%）、「養育」（62.8%）、「助け合い」（62.8%）、「協力」（58.5%）の回答が約6割となったと考えられる。一方、「血縁関係あり」（53.2%）は半数が家族の要素としてあげていたが、「婚姻関係」（38.3%）、「法律」（29.8%）、「同居」（23.4%）などに関しては2～4割と比較的低かった。これに対して、「性別関係なし」（48.9%）、「多様な種類」（45.7%）、「血縁関係なし」（42.6%）の内容も4～5割が回答しており、家族に対して多様な意識を持っている生徒も多いことが分かる。

表1 家族の認識

		事前		事後	
		該当数	割合	該当数	割合
A（母と子）	思う	92	97.9	91	96.8
	迷う	0	0.0	0	0.0
	思わない	2	2.1	1	1.1
B（養子・里子）	思う	75	79.8	88	93.6
	迷う	13	13.8	3	3.2
	思わない	6	6.4	1	1.1
C（同性カップルと養子）	思う	54	57.4	86	91.5
	迷う	32	34.0	5	5.3
	思わない	8	8.5	1	1.1
D（事実婚）	思う	54	57.4	78	83.0
	迷う	33	35.1	13	13.8
	思わない	7	7.4	1	1.1
E（父・母・子）	思う	94	100.0	92	97.9
	迷う	0	0.0	0	0.0
	思わない	0	0.0	0	0.0

表2 家族であると考えた要素

	該当数	割合
本人たちの気持ち	70	74.5
信頼	65	69.1
愛	62	66.0
絆	61	64.9
支え合い	60	63.8
養育	59	62.8
助け合い	59	62.8
協力	55	58.5
血縁関係あり	50	53.2
性別関係なし	46	48.9
多様な種類	43	45.7
血縁関係なし	40	42.6
婚姻関係	36	38.3
法律	28	29.8
同居	22	23.4
よく分からない	3	3.2
その他	2	2.1

次に「いろいろな家族」という動画を見て、家族に対する自分の考えを書いてもらい、その内容を「法律に基づいた内容」「心情」「その他」に分類した(表3)。この結果、「心情」に関する内容が全体の約65%を占めた。それに対して「法律に基づいた内容」を記入している生徒は1割に満たなかった。表2で「心情」に関する要素を選択した生徒が約6割であったが、動画を見た後、増加したことが分かる。「その他」の内容をさらに以下の4つに分類した結果、「多様な種類」（12人、36.4%）、「法律関係なし」（13人、39.4%）、「ありのままの自分」（3人、9.1%）、「その他」（5人、15.2%）となった。家族には、多様な種類があること、また法律という目に見える根拠は関係ないと答える生徒が約4割を占めた。このことから、動画を見たことで、自分の中の考えが少しずつ変化し、多様性を受け入れられるようになりつつあるのではないかと考えた。自由記述には、「地球上という大きな家に生まれた時点でみんなファミリーである」と書いている生徒もいた。

表3 動画を見た感想(自分の考えと話し合いの結果)

	自分の考え		話し合いの結果	
	該当数	割合	該当数	割合
法律に基づいた内容	11	9.7	7	9.1
心情	73	64.6	62	80.5
その他	29	25.7	8	10.4
合計	113	100.0	77	100.0

「いろいろな家族」という動画を見て、自分の考えを書いた後、グループで話し合いを行い、新たな発見について記述してもらった。この結果(表3)、「心情」の割合が8割と高くなった。グループでの話し合いを通して、家族と心のつながりについて強く意識する生徒が増えたのではないかと考えられ、他者との交流は意識変革や価値観の形成に重要であることが分かった。一方、「法律に基づいた内容」の割合はあまり変わらなかった。その中で「血縁関係が必要である」という意見や、「法律上

の家族と気持ち上の家族の2つある、気持ちだけの家族は国に認められないかもしれない」といった、「家族は〇〇である。」というように言い切ることができない、一言では表せられないことを示す記述も見られた。また「その他」には、「国籍も人種も関係ない」、「様々な形がある」というような「多様性」につながる記述が見られる一方で、「周りが認めてくれないのではないか」、「同性婚だと子どもが心配」、「片親は家族ではない」という意見も見られた。このことから、生徒たち自身の生活や経験が考え方にそのまま影響する「家族」についての授業では、多様性についてすぐに受け入れられなくても、まずは「知り理解する」ことが大切であることを伝えていく必要がある。

4.2. 性別役割分担の意識(授業構成の⑤⑥)

次にワークシートに図1を示した。これは専業主婦世帯と共働き世帯の夫と妻の家事関連時間のグラフである。これを見て分かることをワークシートに記入してもらった。表4は、グラフを見て分かることを記入した内容を分類した。例えば、夫はよく働いている。妻は、仕事と家事。夫の家事時間が少ないなど、グラフを見たまま記入している生徒は45.5%であった。それに対し、共働きと専業主婦を比べると・・・や、共働きでも、妻の家事時間が多い。夫の家事・育児時間が変わらない、夫の家事・育児時間がどちらの世帯でも、変わらない、そのため特に共働きの場合の妻の負担が大きいことなど、2つのグラフの比較や、夫と妻で比較できている生徒は40.6%であった。夫が仕事、妻が家事という性別役割分担・性別意識、風習などの記述も見られ、「固定概念」があることに気づくことができていない生徒も若干ではあったが存在した。

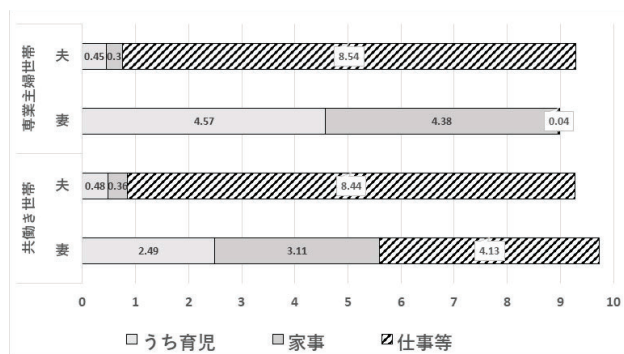


図1 家事関連時間のグラフ

(内閣府男女共同参画局『「平成28年社会生活基本調査」』から作成)

図1とその後の学習(靴下の脱ぎっぱなしやお弁当箱を洗わないなどの実例の写真)を通して、自分自身がこれからどうしていきたいか、これからの社会や家庭はどうあるべきかを記入してもらい分類した結果(表5)、「男女協力する」「家族みんなでやる」「自分のことは自分でやる」など、「協力」に関連する記述が47.6%と最も多かった。今まで当たり前に行われていたことなどを、少しずつできることは自分でやろうとする積極的な意識が芽生えたのではないかと考えた。また、「性別関係なく」、「男だから〜、女だから〜や、決めつけの考え方を無くしていくべき」など、「固定概念からの脱却」に関する記述も約3割あった。「その他」を表6に示す5分類にした結果、「人のために動く」、「気づいた人が動く」といった「主体性」に関わる記述が38.5%、「当番制」、「得意・不得意で分ける」など、選択に関する記述が30.8%あった。さらに、ベビーシッターなどの「外部」の専門家に手伝ってもらうなど、具体的かつ地域とのつながりについても記述していた生徒がいた一方、「変える必要なし」という意見も少ないがあった。

表4 図1から分かること分類

	該当数	割合
見たままの内容	46	45.5
比較できている	41	40.6
固定概念	9	8.9
その他	5	5.0
合計	101	100.0

表5 これからのあるべき姿

	該当数	割合
協力	60	47.6
固定概念からの脱却	39	31.0
その他	27	21.4
合計	126	100.0

表6 表5「その他」の内容分類

	該当数	割合
主体性	10	38.5
選択	8	30.8
家庭ごと	4	15.4
変える必要なし	2	7.7
外部	2	7.7
合計	26	100.0

4.3 性的マイノリティの理解(授業構成の⑦～⑨)

次に性的マイノリティについての理解を深める内容を学習した。「多様な性ってなんだろう？」と「中学1年生の決意～男の子として生きたい～」の2つの動画を視聴し、感想を自由記述してもらい、その内容を分類した(表7)。その結果、「周りの人が受け止める」、「認めることの重要性」について記述している「許容」に関する記述が34.8%と最も多かった。「周りの人々が許容していくと共に、生きやすい社会・環境を作っていく必要がある」と気付いている生徒は13.0%と2番目に多かった。また「その他」の内容を表8に示す5つに分類した。その結果、どれも「感情」に関するキーワードであったことから、同年代の中学生の動画だったことが印象に残ったと考えられる。「自分の性別がいやで死にたいと思う人もいることが分かった」、「世の中には多様な性を持つ人がいること、その人たちが周りに隠している現実があることが分かった」など、新たな発見、改めて感じたことを記述している生徒が約4割を占めていた。その一方で、「受け入れないといけないのは分かるが、難しい」という葛藤(悩み)を持っている生徒や、「学校は性差別があり、生きづらい」という悩みを抱えている生徒の記述も5人ほど見られた。「その他」では、打ち明ける(カミングアウト)の重要性についての記述も見られた。

表7 LGBTQ+の動画を見た感想

	該当数	割合
許容	24	34.8
セクシュアルマイノリティへの理解	6	8.7
生きやすい社会	9	13.0
性の多様性	7	10.1
その他	23	33.3
合計	69	100.0

表8 表7の「その他」の内容

	該当数	割合
発見	10	43.5
驚き	2	8.7
悩み	5	21.7
共感	2	8.7
その他	4	17.4
合計	23	100.0

4.4 これからの家族と多様性(授業構成の⑩～⑪)

最後に今回の授業を通して考える「これからの家族と多様性」について自由記述してもらい、キーワードごとに分類した(表9)。この結果、「みんなが多様性を受け入れ、認め、支えることが大切」という、「多様性の認容」を約4割が記述していた。次いで、家族を考える上で、「自分たちの気持ち」、「本人たちが家族であると思う気持ちを受け入れたい」という、「本人たちの気持ちの認容」や、男女差別や、性別役割などの固定概念を無くして助け合っていくなど、「固定概念からの脱却」に関する記述となった。このことから、多様性について知り、多様性を受け入れようとする心を育成することができたのではないかと考えた。「その他」には、「男女平等や人権の尊重などに関わらせて考える必要がある」という社会科や道徳などの他教科との関わりの可能性について考えることができていた記述がいる一方、「男性が稼ぎ、女性が仕事をせず、家事をする」という文化を存続するべきである」という記述も見られた。

表9 これからの家族の自由記述の内容分類

	該当数	割合
多様性の認容	44	46.8
固定概念からの脱却	27	28.7
本人たちの気持ちの認容	27	28.7
家族の多様化	22	23.4
セクシュアルマイノリティへの理解	15	16.0
支え合い	14	14.9
社会的認容	14	14.9
愛	9	9.6
一般化	5	5.3
生きやすい社会	2	2.1
その他	14	14.9

表10 人間発達分類

	該当数	割合
現状把握	35	37.2
価値の内面化	49	52.1
自己創造	10	10.6
合計	94	100.0

これらの自由記述を人間発達の視点から(坂野・大藪 2003)、「現状把握」「価値の内面化」「自己創造」の3段階に分類した(表10)。「多様性について分かった。性別についての偏ったイメージを無くしていかなければならない」、「気持ちを考え受け止めることが悩んでいる人の助けになると思う」、「知ることが大切で、今までの考えを改めるべきだ」など、「価値の内面化」に該当する記述が半数以上と最も多くなった。次いで、「お互いの気持ちがあれば家族になることが分かった」、「いろいろな形があるのが認められるようになればいいと思う」など、「現状把握」に該当する記述となった。「自己創造」に該当する記述は、「普段の生活でジェンダーの取り組みなどについて考えたことがなかった。もしかしたら、私の周りにも、

そういう思いを伝えたくても伝えられない仲間がいるかもしれないから、昔から深く根付いている男女の考え方を少しずつ変えて、支えられるようになりたい」、「自分達の気持ちが一番大切であり、周りにこう思われるから、こういわれたから嫌だな、と周りの人たちに何か言われるものではないと思った」、「私は正直 LGBTQ+の人を見たことがないので、少し偏見をもってしまう。自分とは無縁のものだと思っているからだと思う。しかし、今回の授業を受けてみて、LGBTQ+だと伝えることができない今の状況を変えていかないといけないと思った」など約 1 割が該当した。これらは揺れ動く正直な気持ちであり、まずはこのように悩みながらも自分で考えることが重要である。

5. まとめ

本研究では、家族と多様性に関する授業案を、小学校、中学校、高等学校の家庭科の学習指導要領と教科書を分析した上で開発・実践したが、本論文では中学校家庭科での授業開発実践について紹介した。授業実践は F 中学校の 3 年生 3 クラス 94 名に対して行った。事前に校長、家庭科の教師に授業案と授業で使用するスライドと授業で使う動画、ワークシートを確認してもらった。家庭科の教師とは事前に授業の打ち合わせを数回実施し、実際の授業は大藪が担当したが、T.T として授業での板書、挙手等を協働実践してもらった。また授業中の大藪の説明に対して、難しい言葉やこれまでの家庭科の授業との関連等について、家庭科教師が生徒に分かりやすい言葉での言い換えや説明の補充をした。授業内容が多かったため、アクティブラーニングの時間は少なかったが、授業後に家庭科教員が、「今回はアクティブラーニングで話し合いというより、知識を得ることが大切である。知ること、将来、こんなことやったな、授業でやったことがここにつながっているのかと新たな発見につながるように、頭の片隅に残るような授業をすることに意味がある。」とコメントしたことからも、常に全てにアクティブラーニングを入れる必要はないことが分かる。また協働実践をしたことによって、この授業後に、再婚時の摘出推定の見直しで、女性は離婚後 100 日間は再婚できないとの規定の撤廃が決まったことから、その内容を教師に伝え、生徒に法律の変更点を教えてもらうことで、現在家族を取り巻く状況の新しい変化をすぐに生徒に伝えることが可能となった。本論文での中学校での授業実践において、家族の多様性の認識、性別役割についての自分の意識、アンコンシャス・バイアスの気づき、そして性的マイノリティの正しい知識を理解できたことによって、自分の周りでの出来事、自分の経験を越えた知識を身に付けることができていたが、理解できるが許容することに葛藤している姿も見られた。中学生の多くは、学校という狭い社会の中だけで生きていることから、その中で価値観が絶対な基準になりがちであり、それから外れることは中々受け入れられない。特に家族やジェンダー、性的マイノリティに関する内容は、授業等を用いて全体で何度も情報を共有し、少しずつ意識を変えていくことが重要となる。今後は、同時に同じ内容の授業案を小学生、高校生と大学生にも実施したため、その比較を行いたい。そして今回のような現在進行形の内容で、教科書や資料集にすぐに反映できない内容の場合、いかに児童・生徒・学生に正しく、客観的に伝えることができるかを現場と一緒に考えていきたい。

参考文献

- 坂野美恵・大藪千穂・杉原利治(2003)、「人間発達を基盤とした消費者教育の構築と生活指標の開発」、『消費者教育』、第 23 冊、67-74
- 牧野カツコ・河野公子他(2021)『家庭基礎 自立・共生・創造』,東京書籍株式会社
- 宮本みち子他(2021)『新家庭基礎 パートナースhipでつくる未来』,実教出版株式会社
- 森岡清美・望月宗(1997)『新しい家族社会学 四訂版』,培風館
- 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領(平成 29 年度告示)解説 家庭編」
- 文部科学省(2017)「中学校学習指導要領(平成 29 年度告示)解説 技術・家庭編」
- 文部科学省(2018)「家庭編 高等学校学習指導要領(平成 30 年度告示)解説」
- 鳴海多恵子他(2021)『わたしたちの家庭科 5・6』,開隆堂出版株式会社
- NPO PILCON,「いろいろな家族の形」,<https://www.youtube.com/watch?v=VZYrgm-0gjU&t=10s>
- 小澤紀美子他(2021)『家庭基礎 とともに生きる 明日をつくる』,教育図書株式会社
- 大竹美登利他(2021)『家庭基礎 明日の生活を築く』,開隆堂出版株式会社
- 佐藤文子他(2021)『新しい技術・家庭 家庭分野 自立と共生を目指して』,開隆堂出版株式会社
- 特定非営利活動法人 ReBit,「多様な性ってなんだろう?」<https://www.youtube.com/watch?v=32bLrf0dBds>
- 「トランスジェンダー」中学 1 年生の決意～男の子として生きたい～<https://www.youtube.com/watch?v=pygpG8T5iGI>

資料 家族の授業案

本時のねらい： 多様な家族の形があることを理解し、これからのよりよい家族のあり方について考えることができる。

時間	学習活動	指導上の留意点
導入 (5分)	1. A～E のイラストを見て、それぞれ家族であると「思う・迷う・思わない」に○をつける。	
展開 (35分)	2. 家族であると考え要素を記入する。	○1 のイラストを踏まえて、家族である要素を考えられるように声掛けをする。
	3. YouTube でピルコン NPO PILCON チャンネルの「いろいろな家族の形」の動画を見て、様々な家族の形があることを知る。(3分)	
	4. 3. の動画を踏まえて、思ったこと、考えたこと、驚いたことなど感想をプリントに記入し、グループで意見交流、発表をする。(7分)	○自分で考えた家族の要素や動画を見て、考えが変化したこと、驚いたことなどを踏まえてグループで交流することで、新たな視点を取り入れることができるようにする。
	5. 家族に関する法律について学ぶ。(2分)	○グラフで現状を知り、さらに、SNS の写真を交えて説明することで、自分事に置き換え、より身近に現実的に、考えることができるようにする。
	6. 男女の家事関連時間に関するグラフを見て、分かったことを記入する。(3分)	
	7. クイズやイラストを通して、自分のアンコンシャス・バイアスに気づき、これからどうしていきたいかを記入する。(5分)	○生徒と年齢が近い、中学生の動画を視聴することで、より身近に感じ、考え方の変容につなげることができるようにする。
	8. LGBTQ+を含む、性の多様性について動画も通して知り、これまでのイメージと、考え方が変化したことを記入する。(13分)	○日本の現状だけでなく、世界の視点から学ぶことで、日本がこれからどのようになっていくとよいかこれらの家族について考える上での一つの要素として考えることができるようにする。
	9. 日本のパートナーシップ制度の現状と、世界の同性婚について知る。(2分)	
まとめ (10分)	10. 今回の授業を踏まえて、もう一度 A～E のイラストを見て、家族であると「思う・迷う・思わない」にそれぞれ○をつける。	
	11. これから家族がどのようなようになっていくとよいかを記入し、グループで交流する。	